

ロン・ミュエク

2026年4月29日(水・祝)ー9月23日(水・祝) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

森美術館とカルティエ現代美術財団は、2026年4月29日(水・祝)から9月23日(水・祝)まで、「ロン・ミュエク」展を開催します。

ロン・ミュエク(1958年オーストラリア生まれ、英国在住)は、革新的な素材や技法、表現方法を用いて具象彫刻の可能性を押し広げてきた現代美術作家です。人間を綿密に観察し、哲学的な思索を重ねて制作されたミュエクの作品は、洗練され、生命感に溢れ、孤独、脆さや弱さ、不安、回復力といった人間の内面的な感情や体験を巧みに表現しています。ロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催された「センセーション:サーチ・コレクションのヤング・ブリティッシュ・アーティスト」展(1997年)への参加で注目を集めて以来、世界各地で個展を開催してきました。

実際の人物よりもはるかに大きく、あるいは小さく造られるその彫刻は、私たちの知覚に対する先入観への挑戦でもあります。同時に、実際に存在していそうであるというリアリティに肉迫する一方で、鑑賞者一人ひとりの解釈や思索を促す曖昧さも残しています。神秘的でありながら圧倒的な存在感を放ち、私たちと身体との関係、そして存在そのものとの関係を問いかけます。

本展は、作家とカルティエ現代美術財団との長きに渡る関係性によって企画されたもので、2023年



パリの同財団での開催を起点とし、ミラノとソウルを経て、森美術館で開催されます。日本では、2008年に金沢21世紀美術館で回顧展が開催されて以来、2度目の個展になります。大型作品《マス》(2016-2017年)など作家の主要作品を中心に初期の代表作から近作まで11点を展示し、作品の発展の軌跡を深く洞察します。そのうち6点は日本初公開で、特に初期の代表作《エンジェル》(1997年)の出展はまたとない機会になるでしょう。また、フランスの写真家・映画監督のゴージェ・ドゥブロンドによる、作家のスタジオと制作過程を記録した貴重な写真作品と映像作品も併せて公開し、ミュエクの比類なき彫刻がどのように生み出されるのかを明らかにします。

《マス》
2016-2017年
合成ポリマー塗料、ファイバーグラス サイズ可変
所蔵:ピクトリア国立美術館(メルボルン)、2018年フェルトン遺贈
展示風景:「ロン・ミュエク」韓国国立現代美術館ソウル館、2025年
撮影:ナム・キヨン 画像提供:カルティエ現代美術財団、韓国国立現代美術館

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234(幡井)、080-2573-6816(上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

略歴

1958年オーストラリア、メルボルン生まれ、1986年より英国在住。映画・広告業界で20年以上働いた後、1990年代半ばに彫刻の制作を開始。1996年、ロンドンのヘイワード・ギャラリーで開催された展覧会で、ポルトガル人画家パウラ・レゴの絵画と共に彼の彫刻《ピノキオ》(1996年)が展示され現代美術界にデビュー。翌年、他界した父親を小さく表現した《死んだ父》(1996-1997年)が、同地のロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催された「センセーション:サーチ・コレクションのヤング・ブリティッシュ・アーティスト」展に出品され注目を集める。以来、ミュエクは世界各地の権威ある美術館で作品を発表。近年ではソウル、オランダのハーグで個展を開催し、今後はシドニーでの個展が予定されている。日本では、十和田市現代美術館で《スタンディング・ウーマン》(2007年)が常設展示されている。一作品を制作するために数カ月、時には数年を要することもあり、過去30年間に制作された作品総数は50点程しかない。

カルティエ現代美術財団

カルティエ現代美術財団は芸術的対話と実験の場であり、アーティストとの緊密な協働による創作と展示を両輪に据えて活動を行っています。

1984年に当時のカルティエのプレジデントだったアラン・ドミニク・ペランによって設立された財団は、分野やジャンルを隔てる壁を越えて、あらゆる領域からアーティストを迎え展示してきました。長年にわたり革新的かつ国際色豊かなプログラムを通して築かれた所蔵コレクションは、分野にとらわれない財団の本質と、同時代の問題をダイレクトにとらえたテーマの幅広さを反映しています。

カルティエ現代美術財団の活動とコミットメントは、人々が現代アートに触れる機会を限りなく広げたいという強い思いと志に根ざしています。展覧会プロジェクトをはじめ、イベントやディベート、ライブパフォーマンスや講演といったプログラムを通して、文化施設の架け橋となり、多文化間の対話の場を創出してきました。

世界を代表する建築家ジャン・ヌーヴェルの設計による、パリ・パレロワイヤル広場に構えた展示空間を新たな拠点として、カルティエ現代美術財団は、アーティストや来訪者とともに、アートの新たな捉え方を探求し、共有していきます。

開催概要

展覧会名: ロン・ミュエク

主催: 森美術館、カルティエ現代美術財団

企画: 近藤健一(森美術館シニア・キュレーター)、チャーリー・クラーク(本展アソシエイト・キュレーター)、キアラ・アグラディ(カルティエ現代美術財団キュレーター)

会期: 2026年4月29日(水・祝) - 9月23日(水・祝)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開催時間: 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで、ただし5月5日[火・祝]、8月11日[火・祝]、9月22日[火・祝]は22:00まで)

*入館は閉館時間の30分前まで *会期中無休

入館料:

	[平日]		[土・日・休日]	
	当日窓口	オンライン	当日窓口	オンライン
一般	2,300円	2,100円	2,500円	2,300円
学生(高校・大学生)	1,400円	1,300円	1,500円	1,400円
中学生以下	無 料			
シニア(65歳以上)	2,000円	1,800円	2,200円	2,000円

* 表示料金は消費税込。

* 事前予約制(日時指定券)を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入が可能です。日時指定券の販売開始日は決まり次第ウェブサイトでお知らせします。

* 当日、日時指定枠に空きがある場合は、事前予約なしでご入館いただけます。

* 本展のチケットで、同時開催プログラムもご鑑賞いただけます。

一般のお問い合わせ: Tel: 050-5541-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234(幡井)、080-2573-6816(上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展の特徴

■ 寡作の作家ミュエクの作品を網羅的に紹介する、日本では18年ぶりの大規模個展 ■ 出展作品の多数が日本初公開

本展は、初期作品から近作に至るまで、作家の制作活動全体を包括的に紹介する大規模な展覧会です。出展作品の多くは日本初公開となります。総作品数が50点程しかないミュエクの彫刻作品を多数集めて個展を開催することは困難であり、11点もの作品を展示する本展は貴重な機会となります。日本での個展は2008年以来となり、これほど多くの作品を展示するのは今回が初の試みです。

■ 大型作品《マス》(2016–2017年)を日本初公開

本展の中心をなすのは、巨大な頭蓋骨の彫刻100点で構成されるインスタレーション《マス》(2016–2017年)です。本作はオーストラリアのメルボルンで開催されたNGVトリエンナーレ 2017で初公開され、その後フランス、イタリア、オランダ、そして直近では韓国で展示されました。展示の際は毎回、美術館の展示室の構造や特性に合わせて再構成され、森美術館でも約300㎡にわたるサイトスペシフィックな展示となります。

■ 鑑賞者一人ひとりの感情を喚起する精緻に表現された彫刻

ミュエクは人間を綿密に観察し、哲学的な思索を重ねて、精緻な技法を用いて彫刻を制作します。洗練され、生命感に溢れ、孤独、脆さや弱さ、不安、回復力といった人間の内面的な感情や体験を巧みに表現した作品は、私たち誰をも魅了し、人間とはなにか、生きるとはどういうことか、という問いを考察する旅へと誘います。

■ めったに見ることができない制作の舞台裏を公開

フランスの写真家ゴートイエ・ドゥブロンドが制作した写真シリーズと映像2点も展示されます。ドゥブロンドは25年以上にわたってミュエクの制作過程を記録しており、ロンドンと英国南部にあるミュエクのスタジオや、創作プロセスの貴重な舞台裏を垣間見ることができます。



《チキン／マン》
監督・脚本：ゴートイエ・ドゥブロンド
2019–2025年
ハイビジョン・ビデオ
13分

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234 (幡井)、080-2573-6816 (上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

主な展示作品

《マス》 日本初公開

本作は巨大な頭蓋骨の彫刻100点で構成されており、作家はそれぞれの美術館の展示空間にあわせたインスタレーションを作り上げています。オーストラリアのメルボルンで2017年に発表されて以来、展示会場ごとに異なる形で展開された本作には常に新しい発見がありますが、森美術館での展示も同様に、ここでしか見るもののできないものとなります。鑑賞者は頭蓋骨自体の形状の複雑さを目の当たりにすると同時に、時間をかけて作品の中を歩き回る間に頭蓋骨の圧倒的な存在感について考えさせられるのです。

この頭蓋骨という主題は、「メメント・モリ」(Memento Mori、死を忘れるな)というラテン語起源の思想とともに、西洋美術史の中では繰り返し登場してきました。また、医学や解剖学、考古学なども想起させ、現代のポピュラーカルチャーでもしばしば用いられるなど、普遍的なものです。タイトルの「マス(Mass)」は、山のように積み重なったもの、大量のものや集団、キリスト教のミサなど、さまざまな意味があります。本作は頭蓋骨それぞれの色合いとディテールが異なっており、個々人の集合体であることを示唆しています。しかし、彼らが誰なのかを知る手がかりはなく、集団として私たちに迫ってくるのです。

人間の頭蓋骨は多義的な物体である。私たちがすぐにそれだと分かる、力強く鮮烈なアイコン。見慣れたものでありながら奇異でもあり、私たちは拒絶しつつも、同時に惹きつけられる。無視することはできず、無意識のうちに私たちは注意を向けてしまうのである。

—ロン・ミュエク

《買い物中の女》 日本初公開

本作では、一人の母親が描かれています。両手は重い買い物袋で塞がり、コートの中には赤ん坊を抱えています。その姿は美化されことなく、疲れ果てた表情からは、日々の責任の重さで押しつぶされそうになっている彼女の日常が読み取れます。原寸よりも小さく造られ、母親の疲労感や脆さや弱さが強調されています。また、遠くを見つめる母親の視線は赤ん坊とも鑑賞者とも合うことはありません。

本作は、西洋美術史の定番である「聖母子像」の現代的な解釈かもしれません。しかし、実際は、作家がロンドン北部のスタジオ近くの交差点で信号待ちをするオレンジ色の買い物袋を持ち赤ん坊を抱えた母親の姿を目にし、駐車券の裏にスケッチしたことがきっかけで制作されました。ミュエクは大都市の日常の中にある切ない光景を表現しています。



《マス》 2016-2017年
合成ポリマー塗料、ファイバーグラス サイズ可変
所蔵：ヴィクトリア国立美術館(メルボルン)、2018年フェルトン遺贈
展示風景：「ロン・ミュエク」韓国国立現代美術館ソウル館、2025年
撮影：ナム・キヨン
画像提供：カルティエ現代美術財団、韓国国立現代美術館



《買い物中の女》 2013年
ミクストメディア 113 × 46 × 30 cm
所蔵：タデウス・ロバック(ロンドン・パリ・ザルツブルク・ミラノ・ソウル)
展示風景：「ロン・ミュエク」韓国国立現代美術館ソウル館、2025年
撮影：ナム・キヨン
画像提供：カルティエ現代美術財団、韓国国立現代美術館

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234(幡井)、080-2573-6816(上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

《エンジェル》 日本初公開

背中に大きな翼を持つ男性が椅子に腰かけている本作は、ミュエクの初期の代表作です。作家が脚光を浴びるきっかけとなった「センセーション: サーチ・コレクションのヤング・ブリティッシュ・アーティスト」展のニューヨーク巡回(ブルックリン美術館、1999-2000年)でも展示されました。作家は18世紀のイタリアの画家ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロによる《ヴィーナスと時間の寓意》(1754-1758年頃)をロンドンのナショナル・ギャラリーで目にし、本作を制作しました。原作の中でヴィーナスと共に描かれるのは「時間」を表す翼を持つ年老いた男性ですが、ミュエクはこの人物像に想を得ています。本作で表現する男性は人間の体と比較すると小さく、俯いてどこか悲しげに物思いにふけており、一般的な天使のイメージとは異なっています。



《エンジェル》
1997年
ミクストメディア
110×87×81 cm
個人蔵
画像提供: アンソニー・ドフェイ(ロンドン)

《イン・ベッド》

巨大な中年女性がベッドに横たわっている本作は、長さ6.5メートル、幅約4メートルの大型作品です。平凡な日常のひとつですが、彼女が手であごを支え、上方を見つめる表情は、不安や憧れ、物思いなど、さまざまな解釈を誘います。モニュメントのようでもある作品のスケール感到に驚かされますが、鑑賞者は目線の高さに位置する女性の顔をまじまじと見つめ、彼女が何を考えているのか思いを巡らすことになります。また、空虚に部屋の向こうを見つめるその視界に私たちが入ることは決してありません。鑑賞者は女性と向き合うことなく作品の細部を凝視することも可能であり、人間同士の関係とは異なる作品と鑑賞者の関係性が生まれるのです。

本作は東京都現代美術館で開催された「カルティエ現代美術財団コレクション展」(2006年)で展示され、作品の画像がその展覧会のキービジュアルに使用されたこともあり、日本でも知られた作品です。



《イン・ベッド》
2005年
ミクストメディア
162×650×395 cm
所蔵: カルティエ現代美術財団
展示風景: 「ロン・ミュエク」韓国国立現代美術館ソウル館、2025年
撮影: ナム・キヨン
画像提供: カルティエ現代美術財団、韓国国立現代美術館

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234(幡井)、080-2573-6816(上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

《マスクⅡ》

本作は、眠りに落ちた作家自身の顔を約4倍の大きさに表現した作品です。作品は台座に載せられており、顔が弛んで見え、わずかに開いた口から息が漏れる音が聞こえてきそうです。しかし、作品の背面は空洞で、この男性が存在しているのか、そうでないのか、という問いを投げかけます。同様に、本当の仮面であれば顔は弛むはずはなく、この顔は人間なのか仮面なのかという疑問も生じます。本作はミュエクの作品の特徴である現実と非現実の絶妙なバランスを見せる、典型的な作品といえるでしょう。タイトルは、本作が文字通りマスク(仮面)である、という事実を単に示しているのか。あるいは、自身の顔立ちの特徴をリアルに捉えた実像のようでありながら、所詮、作家が作り上げた虚構の自己像に過ぎないということを暗に示しているのかもしれません。



《マスクⅡ》
2002年
ミクストメディア
77 × 118 × 85 cm
個人蔵(ロンドン)
展示風景:「ロン・ミュエク」韓国国立現代美術館ソウル館、2025年
撮影:ナム・キヨン
画像提供:カルティエ現代美術財団、韓国国立現代美術館

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/ronmueck/>

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 幡井、上田、伊原

Tel: 070-4303-7234(幡井)、080-2573-6816(上田) E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp